花火と君と

沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花火と君と

【Ｎコード】
Ｎ１９３４Ｉ

【作者名】
沙月

【あらすじ】
銀時にいきなり頼まれた依頼…それは、天敵である、あいつの面倒をみる事だった！！しかし、一緒の時を過ごしていく事で二人の心境に変化が表れてゆく…。

プロローグ（前書き）

読みやすい小説&切ない恋愛ものを目指して頑張っていきたいと思ってます！！かなり短いですが、ぜひ読んでみて下さい！

プロローグ

夏の太陽の日差しがじりじりと肌に突き刺さる炎天下の下、二人は争っていた。「てっめェいい加減にしやがれってんでィィィ！！」
「いい加減にするのはお前の方アルゥゥゥ！！」
男の方――沖田総悟は、相手がまだ小さい少女なのにも関わらず、思い切り少女に向かって刀を振り下げた！！
少女の方――神楽は、その刀を華麗によけて、かわりに拳を総悟に突き出す。総悟はその拳を手のひらで受け止め――。
「何で道端でばったり出くわしただけでこんな大騒動になんだよおめーら」
「珍しく銀さんの言う通りですよ二人とも！！」
「あッ、何お前さりげなく人傷付けてんだよ！！気付かねーと思ったか！！」
「あーもうてめーら！！いい加減にしろォォォ！！」黒髪に煙草の男――土方十四郎は、道のど真ん中にいるのも忘れて怒鳴った。取っ組み合いをしていた総悟と神楽はもちろん、言い合いをしていた男二人――坂田銀時と志村新八も、思わず黙った。
「…おめェらもガキじゃねーんだ、みっともねェ真似すんのはやめろ」
「うるせー土方。みっともねェのはあんただけでィ」「総一郎くんの言うとおりだよ多串くーん？」
「ちょっと銀さん、真撰組に喧嘩ふきこまないで下さいよ！？相手は仮にもお偉いさんなんですから！！」「コルァ、ガキィィィ！！まだ勝負は終わってないアルヨォォォォォ！！」
土方ははぁとため息をついて、来た道を戻り始めた。今は見回りの仕事中だったということを思い出したのだ。
「総悟、てめーはもうどっか行ってろ。足手纏いになるだけだからな」

「分かりやしたァ」
土方の言葉を聞いた総悟は素直に返事をした。仕事をさぼるいい口実ができたのだ、反論する理由はない。「なァ総一郎くん。ちょっと頼みごとしてもいいか」銀時は、ぼりぼりと銀髪を掻きながら総悟に歩み寄った。
「実は俺とぱっつぁん、今から出かけなきゃなんねーんだ。んで、悪ィんだけど神楽の面倒見ておいてやってくれねーか？ついてくってうるせーんだよ」
「嫌でさァ。何が嬉しくてあんなヤツと一緒に居なくちゃなんねーんでィ」
「まーそう言わずにさァ？どうせ暇なんだろ？帰りは多分七時になると思うわ。じゃ、頼むぜ！！」
銀時はそう強引に言い切ると、新八と共にさっさと歩いて行ってしまった。
総悟は納得できない顔をしたが、そんなものがあの銀髪の男に通じる訳が無いと知っていたし、今さら何かを言ったところで銀髪の男達が帰ってくるはずがないという事も知っていた。
―――こうして、総悟は天敵である少女の面倒をみる事になってしまったのだっだ…。

プロローグ（後書き）

読んで下さって、ありがとうございましたっ！！

第一話（前書き）

沖×神の二次創作物語です！！よかったら、前のプロローグからお読み下さい！そちらの方が、物語の筋が通って分かりやすいと思います！！

第一話

総悟は、ちろりと神楽を盗み見た。横でしゃがみこみながら酢昆布を貪っている神楽は、地面を歩く蟻を目で追う事に夢中らしく、銀時達がいなくなっている事にまだ気付いていないようだ。
「…おいチャイナァ」
総悟は小さな声で神楽に話しかけたが、神楽は気付いていない。総悟は、もう一度言った。
「…おいチャイナァ！！」今度はかなり大きな声だったと総悟的には思ったのだが、まだ神楽は気付いていないようだ。ぷちっと総悟の中の何かが切れて、総悟は叫んだ。
「――神楽ァ！！」
「…何アルかさっきから。そんなに言わなくても聞こえてるネ――って、銀ちゃん、新八――――！？」
「旦那達はさっき仕事に出ていったぜィ。気付かなかったんですかィ？」
「…な…！！知ってるなら言えヨ！！…銀ちゃん！！新八ィ…」
「ごちゃごちゃうるせーんでさァ。旦那に頼まれたんでィ、あんたの世話しろって」
「何でお前みたいなやつと一緒に居なくちゃならないアルか！！嫌ヨ！！」
「俺だって嫌なんですがねィ…」
「――仕方ないネ、私、万事屋に帰るアル」
神楽はとぼとぼと歩きだした。
総悟は思わず叫ぶ。
「――俺はァ、約束破るなんて事ァしねェ男なんでさァ！！」
「…はァ？」
総悟の言葉に、神楽は訳が分からないというような顔をして言った。
「お前ばかアルか？約束なんて破ればいいだけネ！！」

「っせェ！！黙ってついて来いってんでィ！！」
総悟はそう怒鳴ると、神楽の手首を強引に掴んで歩きだした。後ろから神楽の声が聞こえてくるが、気にしない。
気付けば総悟の顔は真っ赤に染まってしまっていた。こんなに顔が火照っているのは太陽のせいだろう――総悟は一生懸命自分に言い訳した。

「…ところで。どこ行くつもりアルか」
「…あ」
五分くらいあてもなく歩いた所で、神楽がそう問いかけてきた。そういえば、どこに行くかなんて決めていなかったのだ。
「…ほら、河原ン所で夏祭りがあるだろィ。暇潰しに行くんでさァ」
総悟は、たまたま今日行われている「夏祭り」の事を思い出し、言った。確か、今はもう夕方の六時なので始まっているはずだ――もしかしたら終わってしまっているかもしれない。何せあそこの夏祭りは、終わるのが早いのだ。
「なッ――――夏祭り！？」これは総悟の予想を上回るリアクションだった。
神楽は顔をきらきら輝かせながら叫ぶ。
「夏祭りなんて今まで行ったことなかったアル！！銀ちゃんも新八も、面倒臭いって言って今まで一度も連れてってくれなかったネ――――はッ！！」
神楽はいきなりぐっと顔を歪ませ、黙り込んだ。相手が宿敵だったという事を忘れてしまっていた事を悔やんでいるようだ。
「――――ヘッ」
「な…何笑ってるネ！？」「いや…ッ何でもねェ」
「何でもない事無いアルゥゥゥ！！」
神楽の顔は、今や真っ赤に染まってしまっている。何故かその顔が愛しくて可愛らしくて――――。

思わず神楽から目を逸らしてしまうほどだった。

第一話（後書き）

読んで下さって、ありがとうございましたっ！！よろしければ、感想をお願いしますっ！

第二話（前書き）

プロローグ、第一話の続きのお話です！！ぜひ読んでみて下さい♪
総悟と神楽の距離も近付いていきます…

第二話

河原に近づくに連れて、人が多くなっていくのが分かった。
そういえば、毎年この祭は人が多く、見回りが大変だと土方が言っていたような気がする。屋台の前には、どこも行列が出来ていた。
「…チャイナァ。どこに行き――――チャイナ！？」
どこに行きたいのか総悟が神楽に聞こうと振り返ったが、そこに神楽はいなかった。
まさか、迷子にでもなったんじゃ――――！！
「おい…チャイナァ！？チャイナ――――！！」
「サド！！ここアル！！」後ろの方から声が聞こえたかと思うと、神楽が金魚すくいの屋台の下でしゃがみこんでいた。総悟に向かって手招きをしている。
「ったく…」
総悟が仕方なく神楽の方に近づいていくと――――。
「おーおーかわいいね君。チャイナ服なんか着ちゃって！！ん？お母さんはいるの？」
「俺らと遊ばない？」
神楽のそばに、五～六人の男が近付いてきた。
神楽はフンと鼻を鳴らして男たちに向かって言った。「何アルかお前ら。私と遊ぼうなんて五万年早いネ。早く帰るヨロシ」
「…へー、強気なんだねぇ最近の子は…でも、子供一人で何ができる？…この子を連れてけ」
リーダー格の男が言うと、周りにいた男たちが一斉に神楽の腕を掴み始めた。
「なッ――――！！」
「…てめーらァ…そいつに触れんじゃねェ」
神楽が男たちの手を振りほどこうとした、その時。いつのまにかそ

こには…総悟が立っていた。
「はァ？お前…その服は…真選組の奴だな？俺らはなァ、てめーらみたいな奴ら怖くねーんだよ！！幕府の犬が！！」
リーダー格の男が下品な笑いを顔に浮かべながら叫ぶと、総悟は眉を少し動かして静かに言った。
「っせーなァ…早く離れろってんでィ。てめーらみたいな汚ねェ野郎共に、その女に触れてもらいたくねーんでねェ」
「――はっはっは！！いい度胸だな。だが…一人で何ができる？…やれ」
リーダー格の男が手で合図をすると、六人ほどの男達がにやにや笑いながら総悟に近付いてきた。
総悟はだるそうに呟く。
「…面倒を起こすのは嫌なんですがねィ…」
――それは一瞬の出来事だった。リーダー格の男が気付いた頃には、男達は全員地面に転がっていた。殴られた跡があり、気を失っている。
「ひっ…ひぃっ…！！お、お前何者だぁっ！？」
「…真選組一番隊隊長、沖田総悟でさァ。分かったら早くここから消えなせェ。それとも…殺されたいんですかィ？」
「す…すすすみませんでしたァァァ！！お、おお前らッ、行くぞ！？」
リーダー格の男がそう叫ぶと、気を失っていた――気を失ったふりをしていた男達が素早く立ち上がり、逃げるように立ち去っていった。
「おいチャイナ…大丈夫ですかィ？」
「…私は全然大丈夫ネ！！大体、あんな男達なんか、私一人でも倒せたヨ！！」「…そうですねィ」
総悟は、ふいとそっぽを向いて歩きだす――ちっ、ありがとうも無しですかィ…。
「さ…サド！！」

「…あ？」
「あ…ありがとヨ！！」
「…え？」
「も…もう二度と言わないからな！？早く次遊びに行くアル！！」
今度は神楽がそっぽを向いて、さっさと歩きだした。総悟は一瞬唖然としたが、ついふっと吹き出す。
「おいチャイナ！！」
「なッ！！何アルか！？」「照れてやがんのかァ？顔赤ェですぜェ？」
「うッ、うるさい――――あッ！！サド、あれ見てみろヨ！！」
ばーん、という音がしたかと思うと、星の輝く夜空に花火が上がっていた。
河原にいる人々は、一斉に上空を見上げ始める。
「…きれいアルなァ…」
神楽はぽそりと呟いてそれきり黙り込んでしまった。総悟も空を見上げたまま黙り込む。
それからどれくらい時間がたったのだろう。
気付けば花火は終わり、河原にいた人々はぞろぞろと帰り始めた。
総悟が話を切り出す前に、神楽が口を開いた。
「そろそろ銀ちゃん達、帰ってくるネ…」
「…嬉しいんじゃねーのかィ？俺と一緒にいるのは嫌なんだろ？」
「…お前も言ってたアル」そしてまた、沈黙。ここは総悟が沈黙を破った。
「俺ァ…ほんっのちょっとだけ寂しい…でさァ」
「…きッ…奇遇アルな！！…私もネ」
「…何だそれ…くくッ」　「…えへへッ」
思わず小さな笑いが起こった。
神楽の笑顔を見た総悟は笑うのを堪えて言った。
「…どうです、また来年も一緒に…来やせんかィ」
「――――おゥ！！仕方ないネ、来てやるヨ！！」

「…ほんっと素直じゃねーですねィ…」
総悟はやれやれと首を振ったが、その表情は嬉しさで満ちあふれていたのだった――――。

第二話（後書き）

読んで下さって、ありがとうございましたm（__）m

エピローグ（前書き）

これが最終話です！！なので、よろしければ最初から読んでみてください♪それでは、最終話、ぜひ読んで下さい！

エピローグ

「おーッス総一郎君！！すまなかったな、神楽の世話してもらっちまって」
七時を過ぎた頃、銀時達は帰ってきた。何故か服はぼろぼろになってしまっている。
———ここは万事屋の前。ついに神楽と別れる時間がやってきたのだ。
すると、神楽が口を開く。「あー…き、今日はなかなか楽しかった…ヨ」
「…俺も、でさァ」
なははは、と空気を読まずに笑っていた銀時でさえも黙り込んでしまうぐらい、嫌な空気が辺りを包んでいる。
気を利かせた新八は、銀時に向かって叫んだ。
「銀さん！！僕らは一足お先に帰りましょうか！！」「は！？何でだよ！！何ですかこの空気、あれだよ、恋人の別れシーンみたいな空気になってますけどォ？銀さんそんなの許さないからね神楽ちゃん！！お前はまだ小さいんだよ？ね？考えなおそ？」
「お前何勝手に言ってるアルか。…新八ィ、その白髪天然パーマネントをどうにかしろヨ」
「はいはい。銀さん、ほら行きますよ？」
新八は、ぎゃあぎゃあ喚く銀時の着物の襟を掴んで歩いていく。
———やっと静かになった頃、神楽がもう一度口を開いた。
「…お別れアルな」
「何でィ、女みてーな声出しやがって」
「私はもともと女ネ！！」「ほー…？それは初耳でさァ」
「…ばか。本当にそう思ってるアルか？」
神楽からの問いに、総悟は一瞬考えて言った。
「…何でそんな事聞くんですかィ？」

「…もういいヨ。帰る」　神楽は傷ついた顔になってそっぽを向いた。そして、万事屋の方へと歩きさってゆく。
自分でも分からない気持ちが総悟を突き動かし、気付けば総悟は叫んでいた。
「――――俺は！！女だと思ってない奴なんかと一緒に花火なんて見ねーでさァ！！」
「――――…！？」
神楽は思わず振り返った。総悟の顔は、暗い夜でも分かるぐらい赤い。
「――――ついでに！！好きでもねー奴とも見ねーですねィ！！」
「……へ？」
「もう二度と言わねェ」
総悟はくるっと体の向きを変えて歩き始めた。どうやらもう、言うことは無いらしい。
「――――来年も一緒に花火見るって約束、信じてるアルからな！？絶対絶対、忘れてやらないネ！！」
神楽の言葉に、総悟は小さく手を上げて応える。
月の光は、そんな神楽と総悟の背中を優しく照らしていた――――。

――――万事屋にて。
「銀さん、ほっといていいんですか？神楽ちゃんと沖田さんのこと」
「…ま、いいんじゃねェ？ここは、若ェモンにお任せするとしようや。せっかく俺があんなにぎゃあぎゃあ言ってわざと帰ってきてやったんだからよ？」
新八の言葉に銀時はふっと笑うと、神楽と総悟を見張っていた窓のカーテンをぴしゃっと閉めたのだった。

エピローグ（後書き）

読んで下さって、ありがとうございました！！少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1934i/

花火と君と

2010年10月11日19時06分発行